

帰命無量寿如来



今月は、ごぞんじ『正信偈』のお勤めの、最初の一句についてです。

書き下すと、「無量寿如来(むりょうじゅによらい)に帰命(きみょう)したてまつる」となり、直訳すると「**私・親鸞は、無量寿如来(阿弥陀如来)に全ておまかせいたします**」という意味になります。

『正信偈』の内容はこの後、

- ・阿弥陀如来の救いの中味
- ・阿弥陀如来の救いを説くお釈迦さまの教え
- ・それを伝えた七高僧の教え



と続いていくのですが、親鸞聖人がそうした大切な内容の前に、

「全ておまかせいたします」という言葉を書かれた意味とは何でしょうか・・・？

いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。(歎異抄)

(訳) どのような修行をしても成し遂げることのできない私のような者は、地獄こそが定まった住みかであります。



これは、親鸞聖人ご自身のお言葉です。聖人は自らのことを、「地獄こそが定まった住みかである私」として捉えていました。

どれだけ心を清らかに保とうとしても、怒りやねたみの心が起こる私、それなのに、人には良く思われたいと見栄をはり、自分にさえ嘘をついて日々を過ごしている私…。親鸞聖人は、そうした人間の持つ醜い心と正直に向き合い続けた人でした。そして、阿弥陀仏の救いにすがっていくしか道はない、と考えられたのです。

阿弥陀仏とは、いつの世の人々も、どこの世界の人々も、一人残らず必ず救いたもう仏、という意味です。「いつでも、どこでも、だれでも」ということになれば「**いまここに**いる、この私」も、もれるものではありません。いやこの私こそ、その光のまった**だ中**にいるのです。光の中にありながらその光を見る眼を失った私の上に、仏の慈悲はただ一すじに注がれているのです。

「帰命無量寿如来」と歌われた言葉には、さんさんとふり注ぐ如来の慈光の中に、身も心もゆだねた親鸞聖人の、えもいえぬ安らかな心情がよみとられるのであります。・・・それは、功利的な私心をまったく離れた、絶対随順の信であります。

村上速水 著『正信偈讃仰』より

私ごとになりますが、功利的なふるまいに明け暮れていた私は、60歳で亡くなった父がいなければ、まともに仏法を聞こうなどとは思わなかったでしょう。9歳で亡くなった姪がいなければ、自らの命が永遠であるかのように暮らしていたでしょう。

皆さんの口から「帰命無量寿如来」という言葉が出てくるようになった、そのきっかけを作ってくれた方は、誰ですか？

